

近江の石造五輪塔と無縫塔

五輪塔

私たちがお墓に参りますと、墓地の隅っこの方に丸い石や四角い笠石の転がっているのをよく見かけますが、それらは大てい石造五輪塔の塔石の部分です。

仏教では、宇宙の根本要素は地・水・火・風・空であると考えてこれを五大といい、この五大の変化ですべてが生れるとして五輪ともいいました。五輪塔は、この仏教の思想から生れ、象徴的に形作られたもので、中世から近世初めにかけてたくさん造られました。

五輪図形は、早く大陸からわが国に渡って来たのですが、五輪塔は、大陸では遺品がいまのところ見つかっていないので、わが国独自の造形だろうといわれています。わが国における石造五輪塔の遺品は、平安(末)時代のもものが一番古く、鎌倉時代には急に数がふえてきます。室町時代のものは小柄になり、一石で造られるようになって、造塔が一層さか

んになり、どこの墓地でも見かけられるようになります。

石造五輪塔の構造は、方形の基礎の上に球形の塔身をのせ、これに方錐形(宝形造)の笠をかぶせ、更にその上に半球形の請花をのせ、一番上に宝珠を置きます。これを下から地輪・水輪・火輪・風輪・空輪と名付けています。このうち風・空輪は一つの石で造るのが普通ですが、全体を一石で造ったものもあり、これを特に一石五輪塔と呼んでいます。

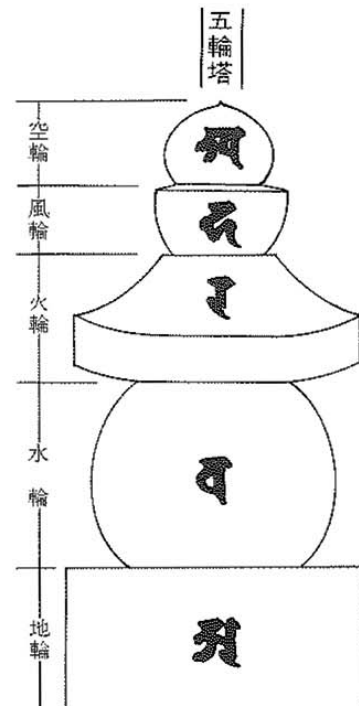
石造の層塔・宝塔・宝篋印塔には、ふつう飾りなどを彫ってありますが、五輪塔にはそれがなく、各輪に梵字が刻まれます。それも丁寧なのは四方に刻まれているますが、正面だけのものや無地のままのものもあり、地輪にかいみょう戒名と歿年月の刻まれているものもあります。

近江の五輪塔

本県には、他の石塔に比べて五輪塔の古い



五輪塔に彫られている梵字



梵字とは、古代インドのサンスクリット語(梵語)をあらわす文字で、年代や地方でちがいがあつたが、わが国に伝えられたのは悉曇(シットン)とよばれる梵字である。

種子といって、仏・菩薩などを特定の梵字であらわしたものが、石造の塔に陰刻されている例が多い。

ものは案外ありません。銘がある塔では、まず五個荘町金堂の馬場に建っている石造五輪塔（町指定文化財）が挙げられます。花崗岩製で高さ 197.3cmの石塔です。地輪は直方体の2石を合わせて造り、その高さは54.5cm、幅は71.5cmで、背面の左右にある2行の銘文によると、正安2年（1300）^{沙弥}某が建てたことがわかります。水輪は壺形の球形で曲線が美しく、火輪は軒反りがゆるやか、風・空輪も雄大で鎌倉時代の五輪塔にふさわしい貫禄を見せてくれます。

この五輪塔から4年後の嘉元2年（1304）に造られた塔に、蒲生町石塔の石塔寺五輪塔があります。有名な三重層塔の右手の土壇に、石造宝塔とともに建っている2基の五輪塔のうち、三重塔から見て向って左手の、水輪だけに梵字が刻まれている塔がそれです。地輪が大きく、水輪はやや平らな球形、風・空輪が少し小ぶりで、見るからに落ちついた古風な姿をしています。この塔の隣にある五輪塔

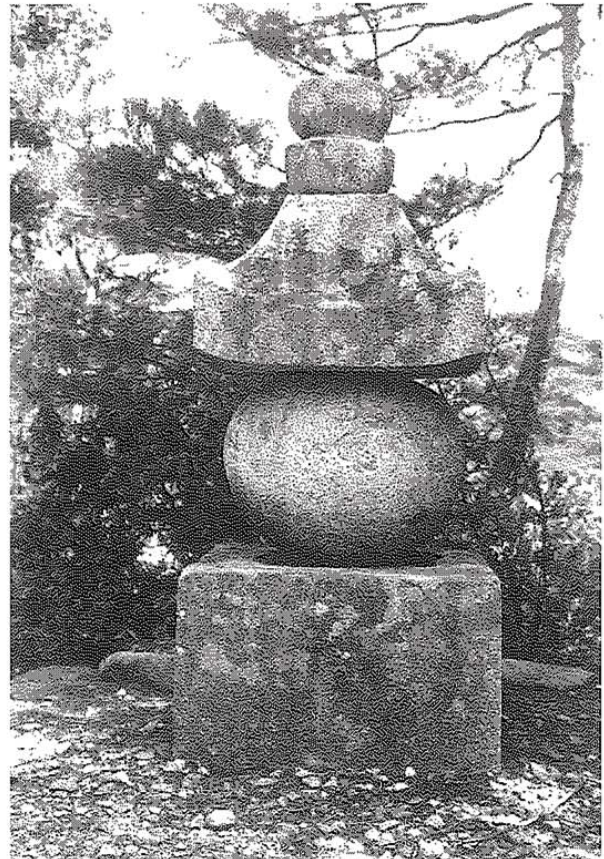
には貞和5年（1349）の造塔銘があり、地輪が高く、水輪は球形で、風・空輪がやや大きく、全体に背が高く少し不安定の感がないわけではありませんが、すべてによく調った形式化したところが見られ、嘉元の塔と見比べると時代の差がよくわかります。またこの塔の銘文によって、近在の大森の人人が浄財を集めて造った供養塔であることがわかる貴重な資料となるもので、嘉元の塔とともに国の重要文化財に指定されています。

石塔寺の貞和の塔と同じように、大衆の浄財によって造られた供養塔には、甲西町岩根の常永寺に康永4年（1345）銘の五輪塔（町指定文化財）があります。このほかに銘のあるものとしては、信楽町勅旨の玉桂寺にある正和5年（1316）の基壇つきの塔や、水輪を失ってはいますが甲良町在士の浄覚寺に嘉元4年（1306）の古塔があります。

中世の無銘の塔は十数基ありますが、そのうち見るべきものとしては、八日市市下大森町



▲金堂馬場の五輪塔



▲石塔寺・嘉元の塔



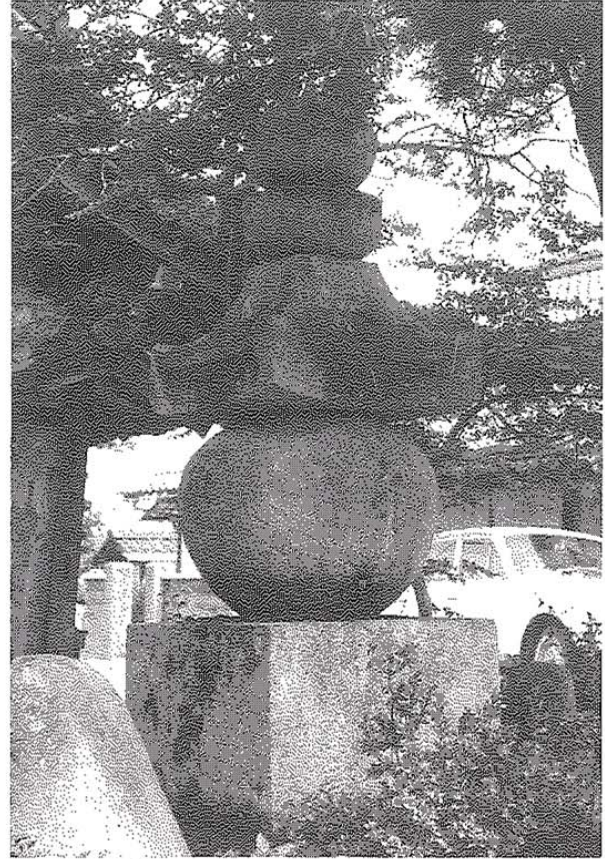
▲石塔寺・貞和の塔

の基壇つきの堂堂とした極楽寺五輪塔、浅井町素盞鳴命神社の五輪塔、西浅井町大浦観音堂の五輪塔などが挙げられます。

一石五輪塔

前述のように、全体が1個の石で造られた五輪塔で、室町時代に入って庶民の墓標として流行し初めました。石材は、花崗岩もありますが、加工のし易い砂岩も多く用いられました。県内では大津市・草津市・守山市などに多く残っており、大たい文亀年間から慶長年間までのものが多く、元禄頃までのものも見かけられます。中でも、大津市の西教寺や穴太の盛安寺、宝光寺、真野谷口の西勝寺、草津市志那の寺院、守山市矢島の少林寺などの墓地に多く見られ、少林寺では30基を数えるほどあります。

この五輪塔の地輪には、中央に梵字、下に戒名、右に年号、左に歿月日が刻まれ、〇〇童子、〇〇童女など子供の墓石まで見られます。この一石五輪塔は、寺院にその頃の過去帳が残っていない室町時代の、その土地の貴



▲極楽寺五輪塔

重な資料となっています。

無縫塔

無縫塔は、鎌倉時代に禅宗とともに伝わってきた禅僧の墓塔ですが、後には他の宗派でも僧侶の墓として造られるようになりました。卵形塔ともいわれるように、台の上の石は卵を立てたような形をしています。その形式に2流あります。一つは、六角形または八角形の基礎の上に、基礎と同角の竿を立て、その上にまた同角の中台をのせ、さらにその上に請花を設けて卵形の塔身をのせるもの、いま一つは、六角形または八角形の基礎に直接卵形の塔身をのせるものです。古い無縫塔は塔身の卵形が低く、後世になるにしたがって高くなり先がとがってきます。

県内では、甲良町正楽寺の勝楽寺無縫塔が代表的なものです。墓地の奥正面に3基並んでいて、中央の塔が開山雲海の墓で、高さ87.5cm、八角形の基礎の上部を反花で飾り、八角柱の竿に「開山」の文字を刻んでいて、一面おきに蓮坐上に宝珠の飾りを陽刻し、塔身は

球形に近く、請花の蓮弁も美しく、南北朝時代初期の様式を示す立派な塔です。向って右方のは二世深溪の塔で少し時代が降り、左方の中興九岩の塔は、塔身が高くなり、飾りが細かいが技巧に過ぎて弱弱しくなっているところなど、室町時代の様式をよくあらわしています。この3塔を比較すると、



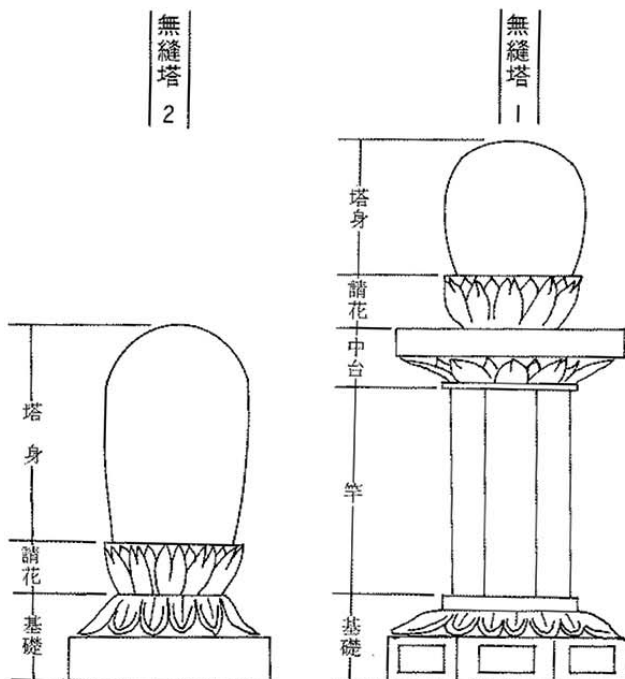
▲勝楽寺・無縫塔

石工の技術の移り変わりがよくわかります。

このほかには、能登川町佐野の善勝寺墓地にある高さ96.5cmの八角形の無縫塔が挙げられます。細部にわたってなかなか手のこんだ塔で、勝楽寺の九岩の塔とよく似ています。中台は厚く、側面を2区にわけて四つ目菱文を飾りつけるなど、室町時代のよく調った塔です。

ま と め

この文化財教室シリーズでは、石造の層塔、



宝塔、宝篋印塔、五輪塔および無縫塔と述べてきましたが、これをまとめてみますと、それぞれ塔のおこりはそれなりに目的がありましたが、わが国に渡ってきますと、やがてほとんど同じような目的で造られるようになりました。一概には言えませんが、これらを大別しますと、(1)舍利の安置を目的としたもの、(2)納経を目的としたもの、(3)先祖・衆生の安楽を願う供養塔、(4)墓の上に建てる墓塔の四つに区分できます。(1)には初期の層塔、(2)には層塔、宝塔および宝篋印塔、(3)には層塔、宝塔および宝篋印塔と比較的初期の大型の五輪塔、(4)には宝篋印塔、五輪塔および無縫塔がはいります。ですから、石塔の形だけで墓塔であるとか供養塔であるなどと断定することはできません。これを見分けるには、銘文や記録によるのですが、無銘、無記録のものは解体や地下調査などによって調べるわけです。最近、開発が盛んになるにつれて、事前の調査をやかましく言われるようになってきましたが、石造の塔を不用意に移動したりしないで調査することが大切です。

(宇野健一氏提供)